

コンベンションと観光は密接な関係にあり、都市の持つ観光的魅力がコンベンション開催の大きな要因となっているといえる。現在多くの都市がコンベンション誘致を目標としており、激しい競争状態にある。そのような中、奈良がコンベンション都市として発展するには何が必要なのか探ってみる。

## 1 観光とコンベンション

### 1. コンベンションとは

コンベンションとは、各種団体や企業の開催する会議や大会、研究会にとどまらず、幅広く人、もの、文化、情報などの交流を促進する非日常的な人々の集まりを指している。それらを大別すると次のような種類を含むものと考えられる。

- ①会議型とは、学会、各種大会、集会、シンポジウム、フォーラム、セミナーなどの形態で、特定のテーマに基づき、参加者が集まり、討議や会合、集会などを行うもの。
- ②メッセ型とは、各種の見本市や展示会など、たとえば新商品の展示で出展企業や主催者からの招待によるものが一般的である。消費者に解放されている場合はイベント的な面もある。
- ③イベント型とは、スポーツや文化・芸術などをテーマとする催事やフェスティバルなどがある。

今日では、コンベンションをMICEという概念で包括し、2009年7月の観光庁の「MICE推進アクションプラン」ではシンガポールなどとの誘致競争に打ち勝っていく方向が示されている。

MICEとは、企業等の会議（Meeting）、企業等の行う報奨旅行（Incentive）、学会等が行う国際会議（Convention）、展示会（Exhibition）の4つの頭文字をとった造語である。

こうした観光庁の施策展開の方向性を見定め、多様なコンベンションを核とした都市づくりを考える必要がある。

### 2. 観光とコンベンション

観光とコンベンションの関係を見てみると、類似点と相違点は次の通りである。

#### 【類似点】

- ①都市に人を集め、経済的・文化的効果を得ることを目的とすること。
- ②ホテル、レストランなど両者に関連する共通の産業やサービスが非常に多いこと。

#### 【相違点】

- ①観光はその都市の観光資源の魅力であるが、コンベンションは施設の便宜性に、その都市の観光資源の魅力も加わる。
- ②観光は一般大衆であるが、コンベンションは各界のリーダーが多い。

コンベンションへの参加者は、会議等の目的で来訪したとしても、そのまま帰途につくわけではなく、開催場所となる都市内で物品やサービスを購入したり、周辺の観光地を見物するなど、何らかの観光活動を行っている。まして会議等参加者の同伴者であれば、コンベンション開催中に観光に出かけることが多い。こうした、いわゆるアフターコンベンションの機能は、都市の観光の活性化にとって大切である。

また、都市が持っている観光の魅力がコンベンション誘致を左右する要因ともなっている。主催者側がコンベンションの開催地を決定する最大の要因は、コンベンションそのものの利便性であるが、参加者の気持ちがコンベンションへの参加と開催地での観光に期待することが大きいことを考えると、観光的魅力が開催地決定に及ぼす影響は大きく、会議は観光の機会に恵まれた都市で開催

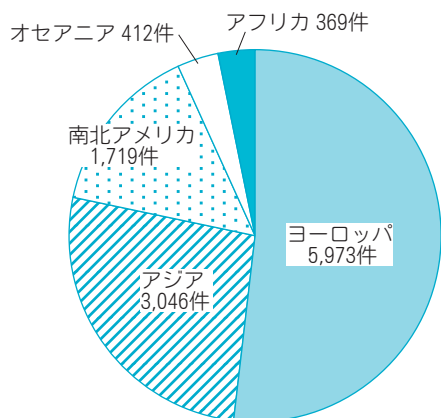
される可能性が高いといわれている。

このように、観光とコンベンションの関係は密接であり、相互に補完的な役割を果たしている。コンベンションの誘致・開催にはその都市の観光の魅力が不可欠であり、反対に観光の振興によってコンベンションの機能は非常に有効である。

## 2 国際会議の開催状況

UIA（国際団体連合：本部ブリュッセル）がまとめた国際会議統計によると、2010年に世界で開催された国際会議は11,519件あった。開催件数の構成を大陸別に見ると、1位ヨーロッパ（5,973件）、2位アジア（3,046件）、3位南北ア

図表1 2010年国際会議の開催状況（大陸別）



(UIA 資料に基づき JNTO が作成)

図表2 国別国際会議の開催件数

開催国	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年
アメリカ	1,145	1,168	1,582	1,713	1,605	1,216	1,114	1,079	1,085	936
日本	233	235	280	285	259	238	448	575	538	741
シンガポール	119	142	142	172	226	318	466	637	689	725
フランス	701	703	829	850	859	803	598	797	632	686
ベルギー	330	364	371	421	382	368	307	383	470	597
スペイン	358	431	454	509	498	484	393	467	365	572
ドイツ	528	543	633	705	616	575	523	440	555	499
韓国	134	127	140	196	223	267	268	293	347	464
イギリス	457	493	555	556	625	483	327	349	347	375
オーストラリア	269	275	313	329	395	463	366	315	421	362
イタリア	462	437	605	552	571	488	414	413	391	357
オーストラリア	295	248	288	318	269	291	272	273	227	356
オランダ	263	306	344	353	429	445	423	428	458	329
スイス	340	378	387	426	361	377	284	232	336	322
中国(香港・マカオ含)	168	187	167	※ 347	352	324	255	278	225	298

※2004年の中国は、マカオの件数が不明のため、香港を含むが、マカオを含まない。

(UIA資料に基づきJNTOが作成)

メリカ（1,719件）、4位オセアニア（412件）、5位アフリカ（369件）となった。（図表1）

次に国別に見ると、1位アメリカ（936件）、2位日本（741件）、3位シンガポール（725件）、4位フランス（686件）、5位ベルギー（597件）の順で、2010年の上位15位までは（図表2）の通りである。このなかで前年に比べて件数が増加及び順位が上がった国は、日本、ベルギー、スペイン、韓国、イギリス、オーストラリア、中国の7か国であった。

さらに世界の都市別にみると、1位シンガポール（725件）、2位ブリュッセル（486件）、3位パリ（394件）、4位ウィーン（257件）、5位ソウル（201件）の順で、上位15位までは（図表3）の

図表3 都市別国際会議の開催件数

開催都市	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年
シンガポール	119	142	142	171	225	318	466	637	689	725
ブリュッセル	223	249	247	286	285	277	229	299	395	486
パリ	311	309	336	326	416	426	315	419	316	394
ウィーン	177	195	204	247	285	363	298	249	311	257
ソウル	103	84	85	126	117	146	121	125	151	201
バルセロナ	113	143	143	172	181	169	161	193	148	193
東京	56	52	63	70	86	77	126	150	134	190
ジュネーブ	203	198	220	227	191	207	170	102	183	189
マドリッド	73	90	94	96	67	98	58	85	61	175
ベルリン	126	122	142	161	140	109	115	84	171	165
ロンドン	137	167	183	194	216	157	103	103	125	164
ブタペスト	79	92	111	157	120	119	70	116	108	144
シドニー	99	89	86	93	80	70	90	97	81	137
アムステルダム	78	112	101	129	132	130	120	99	126	131
ニューヨーク	104	115	131	129	151	108	128	67	95	127

(UIA資料に基づきJNTOが作成)

通りである。なお、東京は7位（190件）であった。このなかで前年に比べて件数が増加及び順位が上がった都市は、ソウル、バルセロナ、東京（56件増、11位→7位）、マドリッド、ロンドン、ブタペスト、シドニー、ニューヨークとなった。

2010年の日本の各都市に

## 特集

おける国際会議の開催件数は（図表4）の通りである。東京に次ぐ横浜が世界順位の24位にとどまり、まだまだ水準は低い。

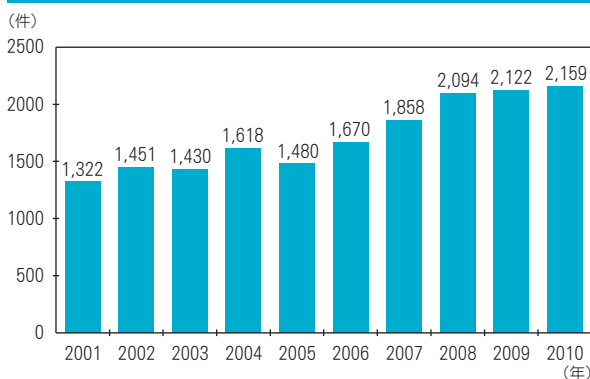
日本政府観光局（JNTO）が発表した2010年に日本で開催された国際会議の開催件数は、前年比1.7%増（37件増）の2,159件となった。また、外国人参加者数も前年比33.1%増（36,039人増）の144,968人となり、いずれも過去10年間で最多を記録した。なお、国際会議に参加した外国人数は、2010年の訪日外客数8,611,175人の1.7%を占めている。

図表4 日本各都市の開催件数（件）

開催都市	2010年
東京	190
横浜	82
京都	61
神戸	45
大阪	32
札幌	31
名古屋	29
仙台	28
つくば	24
千葉	22
福岡	20
北九州	17
奈良	16
淡路	12
その他	132
合計	741

（UIA資料に基づきJNTOが作成）

図表5 国際会議の開催件数（年別）



（出典：日本政府観光局「国際会議統計」）

【UIA（国際団体連合）基準】

- ◇国際機関・国際団体の本部が主催又は後援した会議
  - ・参加者50人以上、参加国数3か国以上、開催期間1日以上
- ◇国内団体もしくは国際団体支部等が主催した会議
  - ・参加者数300人以上（うち40%以上が主催国以外の参加者）、参加国数5か国、開催期間3日以上

【日本政府観光局（JNTO）基準】

- ・主催者：国際機関・国際団体（各国支部を含む）又は国家機関・国内団体（各々の定義が明確でないため民間企業以外は全て）、参加者総数50名以上、参加国：日本を含む3か国以上、開催期間1日以上

## 3 コンベンション都市としての奈良

### 1. コンベンション都市の条件と奈良

コンベンション都市の成立条件は次のような点といえるが、奈良をそれらに照らし合わせて見てみる。

①ある程度の収容力をもつ宿泊施設およびコンベンション開催が可能な施設があること。

観光都市として歴史のある奈良は、ホテル等の宿泊施設はあるものの、収容規模はそれほど大きくない。会場施設は、奈良県新公会堂や東大寺総合文化センターなど奈良らしい雰囲気のある会場が複数ある。しかし、分科会や展示場などに利用できる施設が少なく、あまり大規模なコンベンションは誘致できない。

②交通条件が良いこと。

奈良は電車で京都・大阪から約35分、リムジンバスで大阪国際空港から約1時間、関西国際空港から約1時間20分と交通網が整備されており、近隣都市への移動も便利である。

③都市としての魅力があること。

奈良の魅力は、蓄積された歴史文化の優位性やユネスコの世界遺産に登録されている「古都奈良の文化財」を有する世界的な歴史文化観光都市だという点にある。

④ある程度の都市機能集積があること。

奈良市は全国で29番目の中核市であり、市の北部には関西文化学術研究都市が控え、各社の研究機関や奈良先端科学技術大学院大学などがあり、最新テクノロジーの研究や開発が行われている。

⑤住民のホスピタリティがあること。

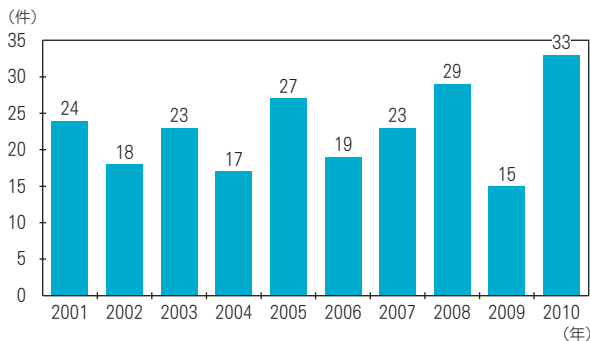
一般市民においても奈良が歴史観光都市であるという認識は比較的高いように思われる。

### 2. 奈良の国際会議の開催状況

日本政府観光局の「国際会議統計」による奈良

市の国際会議の開催をみると、各年若干の増減はあるものの増加傾向にあり、2010年は2001年以降最多の33件が開催された。(図表6)なお、2010年は「平城遷都1300年祭」が開催され、その関係から「APEC観光大臣会合」や「東アジア地方政府会合」などの国際会議が開催されたことが影響したといえる。

図表6 奈良市における国際会議開催件数



(出典：日本政府観光局「国際会議統計」)

2010年の国内の都市別の国際会議開催の状況を見ると、奈良市は全国14位で、上位に位置する政令指定都市以外ではトップである。都市の規模等から考えると奈良市の国際会議開催に対する頑張りを窺うことが出来る。(図表7)

図表7 都市別国際会議開催件数一覧表 (件)

開催都市	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年
東京(23区)	371	408	353	428	357	460	440	480	497	491
福岡市	75	77	77	76	97	126	151	172	206	216
横浜市	15	70	41	82	105	103	157	184	179	174
京都市	111	145	149	170	137	154	183	171	164	155
名古屋市	62	86	83	89	108	109	109	130	124	122
神戸市	82	79	84	44	58	76	89	94	76	91
札幌市	46	42	46	65	54	48	44	77	82	86
仙台市	46	41	37	43	42	45	51	63	60	72
大阪市	83	82	80	94	89	111	76	77	94	69
つくば地区※1	76	55	72	56	60	64	82	80	74	69
千里地区※2	25	32	39	58	35	49	32	53	71	65
千葉市	19	16	34	59	38	39	42	67	63	56
北九州市	31	18	28	30	19	28	43	47	50	49
奈良市	24	18	23	17	27	19	23	29	15	33
金沢市	10	11	12	13	10	10	20	16	27	31

※1：「つくば地区」は、つくば市、土浦市を含む  
 ※2：「千里地区」は、豊中市、吹田市、茨木市、高槻市、箕面市を含む  
 (出典：日本政府観光局「国際会議統計」)

また、奈良県で開催される国際会議を見てみると大部分が奈良市で開催されており、2001年から2010年にかけて奈良市以外では生駒市、橿原市、天理

市、大和郡山市、明日香村で開催されている。

2010年の国際会議の開催を都道府県別にみると東京都(510件)、福岡県(269件)、神奈川県(180件)、京都府(160件)、大阪府(152件)の順で2008年以降トップ3は変わっていない。(図表8)

図表8 都道府県別国際会議開催件数一覧表 (件)

	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年
北海道	53	50	50	77	59	51	47	87	92	97
青森県	2	7	2	2	3	2	2	3	1	1
岩手県	3	3	3	0	2	0	1	2	1	6
秋田県	2	1	0	1	0	1	0	3	7	1
山形県	7	2	2	3	3	1	0	2	1	2
宮城県	49	44	41	49	47	53	57	66	67	74
福島県	3	3	5	3	1	0	2	1	2	2
群馬県	5	4	2	0	1	1	0	2	0	4
栃木県	0	3	1	6	3	1	3	0	0	1
茨城県	77	61	75	56	60	64	84	80	76	69
千葉県	41	34	58	89	57	59	64	104	99	103
埼玉県	0	6	3	2	2	1	3	7	6	8
東京都	375	420	368	434	359	462	445	486	505	510
神奈川県	21	77	55	85	106	103	177	192	197	180
新潟県	8	8	13	16	18	14	24	22	25	30
長野県	11	11	8	8	8	4	9	5	6	6
山梨県	1	4	3	3	1	1	1	2	7	3
富山県	11	3	3	1	0	3	5	4	1	8
石川県	16	14	13	15	15	12	26	18	35	38
福井県	5	4	5	4	3	1	3	6	1	2
静岡県	11	11	8	14	15	10	23	18	16	17
岐阜県	8	11	5	7	6	6	5	8	12	13
愛知県	69	98	90	95	114	109	122	152	137	139
三重県	2	0	3	2	1	0	1	2	6	1
滋賀県	0	2	9	2	1	1	1	8	4	8
京都府	118	156	159	181	141	156	187	180	169	160
奈良県	24	18	26	18	27	19	26	31	20	36
和歌山県	0	0	1	0	0	0	1	2	1	1
大阪府	113	125	125	160	135	182	124	144	183	152
兵庫県	106	106	123	86	93	100	124	123	102	121
鳥取県	4	5	1	3	3	6	3	3	0	0
島根県	4	4	3	4	1	2	3	8	2	2
岡山県	5	4	6	6	7	2	6	3	8	11
広島県	28	19	22	37	28	26	24	35	32	41
山口県	3	3	5	0	3	2	3	4	3	2
香川県	6	5	2	8	6	4	2	8	0	4
徳島県	2	4	3	1	4	1	2	1	0	0
愛媛県	5	3	2	4	2	1	3	0	2	3
高知県	1	2	0	1	0	0	3	1	2	0
福岡県	109	95	109	108	116	154	194	219	278	269
佐賀県	0	1	0	0	1	0	0	0	0	1
長崎県	7	5	6	5	12	11	6	6	6	8
大分県	2	0	3	4	1	0	5	4	1	6
熊本県	8	5	6	4	5	22	30	17	9	2
宮崎県	1	4	4	5	3	4	1	2	3	7
鹿児島県	0	5	2	6	4	3	3	4	5	4
沖縄県	5	17	17	13	13	20	13	33	19	16

(出典：日本政府観光局「国際会議統計」)

## 4 奈良のコンベンションと観光戦略

### 1. 奈良県ビジターズビューローの役割

各都市には、コンベンションの誘致、開催支援を行う組織が自治体や地元財界の支援を受けて設立されていることが多い。その組織が行う事業としては、主にコンベンションの誘致活動、コンベンション施設・観光等の広報、主催者への会議場・通訳等の紹介、主催者への財政支援、アフターコ

## 特集

ンベンションの企画、地元自治体との連絡・調整などがある。奈良県では、その役割を果たすため「一般財団法人奈良県ビクターズビューロー」が2009年4月に設立されており、会議の主催者や参加者に対して、次のような支援を行っている。

## ◆コンベンション支援制度

- ・地域情報提供
- ・看板支援
- ・コンベンションボランティアの派遣
- ・ビニールバッグの無料提供
- ・観光パンフレットの無料提供
- ・記念品の無料提供
- ・コンベンションのPRポスターの掲示等

## ◆国際コンベンション開催助成金制度

## ◆アフターコンベンション開催助成金制度

奈良県ビクターズビューローでは、「徒歩10分圏内に集約された奈良のユニークベニュー」と題する提案書を作成した。(ユニークベニューとは、本来会議等の会場ではないが、コンベンションに利用できる施設のこと)

そのなかでは、東大寺の境内にある「東大寺総合文化センター」や、能舞台に立って発表できるという能楽ホールを持つ「奈良県新公会堂」などを会議の会場に、食事を「夢風ひろば」で取り、「正倉院展」でおなじみの「奈良国立博物館」にある「なら仏像館」を貸切で見学し、地下のティールームでレセプションを開くなど周辺施設の協力を得た企画を持ってコンベンションの誘致を行っている。

また、近隣の大学教授との結びつきをより親密にすることによって、学会やシンポジウムなどの情報を集めている。また、教授からの紹介によって新しい人脈づくりにも力を注いでいる。

## 2. 奈良の特性を活かしたコンベンションの創造

奈良のコンベンションを振興するには、奈良県

をはじめとする行政や奈良県ビクターズビューローだけでなく、観光事業に携わる者のほかあらゆる事業者、社寺、県民などが協力、連携することが必要であることは言うまでもない。

2011年9月にはコンベンションの誘致活動に取り組む行政と観光事業者の連携組織「奈良県国際会議・国内会議誘致推進本部」設立され、2027年の国際会議の開催目標を40件としている。

コンベンションには、学会や団体の定例会議のように定期的に開催が決められているものと、社会的要請により必要に応じて開催されるものの2種類がある。コンベンションの主催団体が開催の決定を行う時に奈良県ビクターズビューローなどの機関が奈良を開催地として選ぶよう働き掛けを行って誘致するのが一般的である。しかし、開催地である奈良がコンベンションを創造することも可能であると考えられる。奈良の歴史、自然、文化、産業等の特性を活かし、国際会議を自ら企画し、関係機関・団体に働き掛け、開催の実現を図るとともに、運営に関しても積極的に参画し、県民の理解と協力を促すのである。

奈良においても、主催団体による定期開催、随時開催のコンベンションだけでなく、地元が主体となった奈良の特質を活かしたコンベンションを開催していく必要がある。そして、その開催が参加者の視察・体験・交流などを伴うことから、コンベンション自体が奈良の観光に関わる可能性が高くなると思われる。

## 3. 最近の観光動向に則したコンベンションのあり方

近年、観光は周遊等を目的とする物見遊山型の観光から参加体験型、自己実現型の観光へと、また受動的・静的観光から能動的・動的観光へと変わりつつある。参加形態も、企業・地域などの団体から友人やグループ、家族という個人に移りつつあ

る。また、グリーンツーリズム、エコツーリズムなどの新しい観光形態が徐々に浸透してきている。このような変化の背景には、個人の余暇欲求の一層の高度化や、自然に対する積極的な関心と行動を求める人が増加していることにあると考えられる。

奈良県が政府系国際会議等の誘致を本格化させていくために作成したリーフレット「国際会議を奈良で～奈良県からのご提案」の「日本のまほろば」奈良を満喫するアフターコンベンションのなかで、日本文化の発祥地、奈良だからこそできる日本体験として、奈良公園の鹿寄せ、写経・写仏、酒蔵見学・利き酒体験、握り墨等の体験型観光を紹介しており、今後のアフターコンベンションの方向を示している。奈良が持っている歴史・文化自然等の観光上の基本的資源にさらに付加価値を加えている。これらの観光がより魅力的なものとなるには、国内外の観光客を迎え、対応する人々の高いホスピタリティが求められる。参加体験型や自己実現型の観光が志向されている今、開催地における人々の交流とその質が重要なものであり、もてなしの心が観光の成否の鍵を握っている。つまり、迎える都市や観光地のホスト側の役割も、やはり参加や自己実現を求める幅広い層の人々によって担われなければそうした観光は成り立たないといえる。コンベンションの成功は市民の協力抜きにしてはむずかしく、特にこの点でボランティアの存在と役割が注目されている。

現実にはボランティア活動を行う人にとっても、コンベンションは大きな魅力を持っている。コンベンションおよびそれに連動する観光のボランティア活動では、来訪者の役に立つということだけではなく、むしろ自己啓発的な意味合いも大きく、自分自身が国内外の人々と交流すること等を通じて多くのことを学べるのが大きな動機になっている。

## 5 むすび

コンベンションの開催は、開催地を中心に大きな経済効果をもたらすといわれている。コンベンションを誘致して開催件数を増やすことも必要である。しかし、それ以上に開催されたコンベンションがその地域にどれだけ恩恵をもたらすかがより大切である。開催の波及効果を最大限に吸収するための仕掛けをいかに作るかである。つまりコンベンション参加者がその地域でどれだけお金を消費してくれるかの仕組みを作る必要がある。

奈良は、コンベンションの開催地として観光の機会に恵まれた都市という良い条件を備えている。今後、歴史観光都市としての魅力を十分に活かし、会議規模に応じた奈良らしいコンベンションを戦略的に展開していく必要があると思われる。検討すべき課題には、奈良の特性を活かしたコンベンションを自ら企画、創造することや、観光目的も参加体験型、自己実現型へ変化している最近の観光動向を踏まえたアフターコンベンションを設定すること、そして、市民の参加、協力とホスピタリティによって支えることなどがある。

奈良は歴史、文化、自然が見事に調和した世界に誇れる都市である。「和」を尊ぶ精神、自然への畏敬と共生など、日本人独特の精神文化や美意識の源流は奈良にある。奈良こそ国際会議の会場にふさわしく、そこで開かれるコンベンションを企画、開催することで、観光振興の一助としていくことを期待したい。

(阪本安平)

### 【参考文献】

- ・「コンベンション」田部井正次郎著 サイマル出版会
- ・「観光活性化のマネジメント」内藤錦樹著 同文館出版
- ・「おこしやすの観光戦略」山上徹著 法律文化社
- ・「観光ビジネス論」谷口知司著 ミネルヴァ書房
- ・2010年国際会議統計 日本政府観光局